

ビルヴァーシュタカム  
アーディ・シャンカラチャーリヤによる賛歌

第1節

त्रिदलं त्रिगुणाकारं त्रिनेत्रं च त्रयायुधम्।  
त्रिजन्मपापसंहारम् एकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*tri-dalaṁ tri-guṇākāraṁ tri-netraṁ ca trayāyudham |*  
*tri-janma-pāpa-saṁhāram eka-bilvaṁ śivārpaṇam ||*

3度の生涯の罪を破壊するもの、  
3枚の小葉からなるビルヴァの葉は、  
存在の三つの性質、  
シヴァ神の三つの目、そして  
彼の三叉(さんさ)の武器——トリシューラ——を体現している。  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

第2節

त्रिशाखैर्बिल्वपत्रैश्च ह्यच्छिद्रैः कोमलैः शुभैः।  
शिवपूजां करिष्यामि ह्येकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*tri-śākhair bilva-patraiś ca hyacchidraiḥ komalaiḥ śubhaiḥ |*  
*śiva-pūjāṁ kariṣyāmi hyeka-bilvaṁ śivārpaṇam ||*

私は三つの葉柄を持つビルヴァの葉——縁起がよく、柔らかで、完全な葉——  
でシヴァ神を崇拝する。  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

第3節

अखण्डबिल्वपत्रेण पूजिते नन्दिकेश्वरे।  
शुद्ध्यन्ति सर्वपापेभ्यो ह्येकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*akhaṇḍa-bilva-patreṇa pūjite nandikeśvare |*  
*śuddhyanti sarva-pāpebhyo hyeka-bilvaṁ śivārpaṇam ||*

ナンディ[聖なる雄牛]の主であるシヴァが、  
完全なビルヴァの葉で崇拝されると、  
すべての罪が清められる。  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

第4節

शालिग्रामशिलामेकां विप्राणां जातु अर्पयेत्।  
सोमयज्ञमहापुण्यम् एकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*śāligrāma-śilām ekāṁ viprāṇāṁ jātu arpayet |*  
*soma-yajña-mahā-puṇyam eka-bilvaṁ śivārpaṇam ||*

功德を得るために、なぜ希少なシャーリグラマ[聖なる石]を  
ブラーミンの司祭にささげるのか！  
ソーマ・ヤグニャ[ヴェーダの火の儀式]に等しい  
最高の形の功德を授けるものとして、  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

第5節

दन्तिकोटिसहस्राणि वाजपेयशतानि च।  
कोटिकन्यामहादानम् एकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*danti-koṭi-sahasrāṇi vājapeya-śatāni ca |*  
*koṭi-kanyā-mahādānam eka-bilvaṁ śivārpaṇam ||*

数百万頭の象の慈善の贈り物に等しく、  
100 回のヴァーージャペーヤ・ヤグニャ[王家のヴェーダの火の儀式]に等しく、1000 万人  
の娘を嫁がせることに等しいものとして、  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

第6節

लक्ष्म्यास्तनुत उत्पन्नं महादेवस्य च प्रियम्।  
बिल्ववृक्षं प्रयच्छामि ह्येकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*lakṣmyās tanuta utpannam mahādevasya ca priyam |  
bilva-vṛkṣam prayacchāmi hyeka-bilvam śivārpaṇam ||*

ビルヴァの木は女神ラクシュミーの姿から生まれ、  
偉大なシヴァ神、マハーデーヴァにとって大切なものである。  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

第7節

दर्शनं बिल्ववृक्षस्य स्पर्शनं पापनाशनम्।  
अघोरपापसंहारम् एकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*darśanam bilva-vṛkṣasya sparśanam pāpa-nāśanam |  
aghora-pāpa-samhāram eka-bilvam śivārpaṇam ||*

ビルヴァの木を見たり触れたりすることは罪を滅ぼす。  
最もおぞましい罪を滅ぼすために、  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

第8節

मूलतो ब्रह्मरूपाय मध्यतो विष्णुरूपिणे।  
अग्रतः शिवरूपाय ह्येकबिल्वं शिवार्पणम्॥

*mūlato brahma-rūpāya madhyato viṣṇu-rūpiṇe |  
agrataḥ śiva-rūpāya hyeka-bilvaṃ śivārpaṇam ||*

ビルヴァの木は、根としてブラフマー神の形を取り、  
幹としてヴィシュヌ神の形を取り、  
枝と葉としてシヴァ神の形を取る。  
シヴァ神に神聖なビルヴァの葉をささげる。

#### 第9節

बिल्वाष्टकमिदं पुण्यं यः पठेच्छिवसन्निधौ।  
सर्वपापविनिर्मुक्तः शिवलोकमवाप्नुयात्॥

*bilvāṣṭakam idaṃ puṇyam yaḥ paṭhec chiva-sannidhau |  
sarva-pāpa-vinirmuktaḥ śiva-lokam avāpnuyāt ||*

ビルヴァの葉をたたえるこれらの8節は功德を授ける。  
シヴァ神の前でこれらを朗唱する者は誰でもシヴァの領域に到達し、  
あらゆる罪から解放される。

## シヴァ神の住まいに入る

### エリザベス・グリムバーゲン

シヴァ神の崇拝はヴェーダの時代にまでさかのぼります。実際、考古学者によって発掘された最も古いシヴァ・リングムは紀元前3世紀と推定されます。

リングムは、始まりも終わりもない宇宙の火柱、スタンバを表しており、シヴァ神はそこから現れたと信じられています。すべてのものが現れ、すべてのものが戻る、形のない無限の源を表すものと見なされ、リングムの長球の形は地上の者と神聖なる者を結び付けます。またしばしば、私たちが知っているように、常に宇宙を創造しているシヴァ神と女神シャクティ(またはパールヴァティー)の結合の無限の創造的エネルギーを表しているとも理解されています。

シヴァ神は破壊の最高に力強い力として描かれている一方、その慈悲心でも知られています。『シヴァ・プラーナ』では、シヴァ神を喜ばせる崇拝の方法が述べられています。これらの中で基本的なものは、アビシェーク、すなわち「儀式的な沐浴(もくよく)」と、ビルヴァの葉をリングムの姿のシヴァ神にささげることです。

ビルヴァの木はインドが原産で、ヒマラヤ山脈の斜面に生育が認められています。何世紀もの間、この木の葉と茎と実は、その薬効のために大切にされてきました。それはまた、シヴァ神に対して神聖なものと言われています。実際、『シヴァ・プラーナ』では、ビルヴァの葉はシヴァ神自身の顕現そのものであるとされています。他のプラーナでは、その木はシヴァ神の配偶者、女神パールヴァティーの汗の滴からできたとされています。さらに他の物語には、上記の賛歌「ビルヴァーシュタカム」のように、この木は女神ラクシュミーの体から生まれたと描かれています。

「ビルヴァーシュタカム」は、シヴァ神への1枚のビルヴァの葉のささげ物が描かれた八つの詩節で、尊敬されるアーディ・シャンカラチャーリヤによって書かれました。そして神にこの単純なささげ物がなされる時によく歌われます。ビルヴァの木は神聖なる者の住まいと考えられるだけでなく、その三つ葉の形も神聖な象徴と共鳴します。この賛歌の第1節では、この葉の形は、存在の基本的な資質である三つのグナ(サットワ、ラジャス、タマス)、シヴァ神の三つの目、彼の武器である三つまたの矛の3本の突起を表していると言っています。最後の説明的な節ではこの3の象徴が強められ、ビルヴァの葉それ自体が創造、維持、破壊(ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ)を表す神性の三つの側面を含んでいると述べています。

この世のすべての宝を考えるにつけ、最もシヴァ神を喜ばせるのは単なる葉だということは驚きです。その葉は神の無限の寛大さを呼び起こすほどに吉兆で、とても神聖なのです。神の慈悲深さは、毎年マハーシヴァラトリーのお祝いの間、インド中やシッダ・ヨーガの道で語られている**獵師とシカの物語**にとっても分かりやすく示されています。『シヴァ・プラーナ』のこの物語の中で獵師は、「偉大なシヴァの夜」にそうとは知らずにビルヴァの木に隠れて獲物を待っていました。木の根元にシヴァ・リングムがあり、その上の枝には獵師の水筒がありました。一晩中、獵師が体重を移動させるたびに、ビルヴァの葉と水滴がシヴァ・リングムの上に落ちました。獵師は自分自身の行為に気づかないままシヴァ神を崇拝しているのです。夜が更けるにつれ、獵師の意図せぬ礼拝も続きます。朝までには、彼の心は慈悲で満たされ、もはや獲物を渴望することはありませんでした。

私はこの話が大好きです。そしてその意味を熟考するのが大好きです。獵師が自分の行為に気づいていなくても、シヴァ神は彼の無限の慈悲で獵師の心を浄化するというところに、私はいつも心を打たれます。私にとってそれは、神はいつも存在し、たとえ私たちが気づいていなく

でも、常に私たちの心の状態に気づいているということを意味します。これは私にとって、とても心が慰められる考えです。

アーディ・シャンカラチャーリヤは、それを歌う者はシヴァの住まいに連れて行かれるであろうと言って、彼の賛歌を結んでいます。シヴァの住まいとは何でしょうか？ シヴァ・リングムは私たちに示唆を与えています。シヴァの住まいは形がなく、あらゆるものの無限の源で、すべてのものがそこから現れ、すべてのものがそこへと戻る境地です。

かつて私は、インドのガネーシュプリーのシッダ・ヨーガのアーシュラム、グルデーヴ・シッダ・ピートゥでかなりの時間を過ごす機会がありました。毎夕セヴァの後、私はアーシュラムの上方の庭にあるシヴァ・テンプルに引き寄せられました。この白い大理石でできた寺院には、黒い大理石のリングムがありました。プラナムを行い花をささげた後、私はよく隅に座り、シヴァ・リングムを見詰めたものでした。それは全く魔法のような時間でした。私のマインドは完全に静かになり、時間を超越した陶酔させるような平安に包まれました。そうして、私はシヴァの住まいに入ったと感じました。

シッダ・ヨーガの道では、私たちはシヴァ神を、私たち一人一人の内側に宿り、そして全宇宙に浸透する至高なる意識として崇拝します。「ビルヴァーシュタカム」を朗唱してシヴァ神を崇拝する時、私たちは至高なる意識と一つであると——そして私たち自身の大いなる心はシヴァ神の住まいであると体験することができるのです。

